

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 2年 5月 22日現在

機関番号：12601
研究種目：奨励研究
研究期間：2019
課題番号：19H00142
研究課題名：配慮を要する学生を対象とした産学福連携就労支援クラス創出の試み

研究代表者
鬼塚 淳子 (ONIDUKA, Junko)
東京大学相談支援研究開発センター 特任助教

交付決定額（研究期間全体）（直接経費）：540,000 円

研究成果の概要：

本研究では、特別な配慮（不適応、障害、未診断含む）を要する学生への就労支援を試みた。研究(1)A 大学において、先行研究と同様の居場所整備とピアサポートグループを創出した。研究(2) B 大学の就労継続支援として、先行研究参加者で連絡が可能な 14 名（2 名在学中）を対象に就労状況を聴取した結果、12 名中 11 名が就労を継続、1 名が新規就職、就職活動変化スケールは 7.14/8 ポイント、就職学生の約 9 割が 2 年継続、約半数が希望職種に就職した。研究(3) 就職後 2 年継続中の参加者 10 名の話から、卒業以降の肯定的な変化や就労過程での気づき、ピアサポートの相互作用の継続が伺えた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

先行研究で行なった、ピアサポートグループによる障害学生への就労支援に続き、本研究では、就職後の継続、仕事のマッチングについて聴取を実施した結果、2 年後の定着の高さが窺えた。更に、在学時からの教育支援と産学福連携により、ピアサポートグループが就職後も継続し、選択肢が狭くなりがちな障害学生の進路に幅が生まれ、自身の現状や資質を生かす選択が可能となる点が示唆された。また、本実践を元に、他大学の学生支援機関においても同様の就労支援の場が創出できたことから、ピアサポートを基盤とした障害学生に向けた教育支援グループ実践の効果と汎用性が例証された。

研究分野：臨床心理学、人間性心理学、感性表現学、障害学生支援、対人支援学（ピアサポート）

キーワード：特別な配慮を要する学生、ピアサポートグループ、産学福連携、資質を活かした就労、就労継続支援

1. 研究の目的

本研究では、近年急増する配慮（不適応、疾患・身体・精神・発達障害等）を要する学生への卒業期・就労支援として、学生の個性を活かせる就労に向けて、就労継続支援 A 型事業所と連携した就労体験及び継続の支援クラスを創出する。1. 就労支援学生クラスを設置、継続 A 型事業所での体験・試用プログラム作成、2. A 型事業所での就労体験・アセスメント、3. 試用期間から正規就労へのつなぎ、以上の道筋と実体験の場を在学中から卒業まで一貫した提供により、特に就労が困難な精神・発達障害学生特有の適性や能力を活かせる就労と継続・定着を、大学の教育的支援の視点から支援する、新たな社会参加モデル創出を行う。

2. 研究成果

研究(1)：「配慮を要する学生を対象とした産学福連携による就労支援グループ実践の試み」
A 大学において、先行研究と同様の学内就労支援グループを作り、就労支援を試みた。
(※1：A 大学に関して、研究代表者が期の途中で異動したため、人を対象とした研究倫理規定に則り、本研究の詳細についての報告は行わないこととする。)

研究(2)：「配慮を要する学生を対象とした学内就労移行支援クラス参加者に関する継続研究」
B 大学における先行研究②（学内就労支援プレワーククラス、科学研究費挑戦的萌芽研究課題番号 15K13255、研究終了年度 X 年、以下プレワーク）に参加し、就職した学生が資質や特性を活かした仕事に就けているか、仕事が継続できているかを調査するため、参加学生に就労後の経過

について、インタビュー調査を行なった。

[概要] 実践場所：B 大学教室，他 実践期間：X+1 年 4 月～X+2 年 3 月，スタッフ：B 大学常勤講師（X 年当時，以下 T），学修支援コーディネーター（X 年当時，以下 Co.），実践内容：1) 第 1 回お話し会(4 月大型連休中)，参加：プレワーク利用学生 8 名，先行研究①（特別支援クラスピアルーム，科学研究費挑戦的萌芽研究課題番号 24653298，研究終了年度 X 年，以下ピアルーム）利用学生 3 名，計 11 名，2) 第 2 回（12 月年末）お話し会，対象：プレワーククラス利用学生 5 名，ピアルーム利用学生 3 名，計 8 名，うち 2 回重複参加 3 名，3) 就労状況調査方法：2 回のお話し会案内メールの返信，及び T，Co.への相談・連絡を含む。

[実践結果]：プレワーク（X-2 年～X 年）の参加学生 20 名中，現状把握が可能な 14 名を対象に就労状況を調査した結果，X+2 年度対象 12 名（2 名は在学）中 11 名が就労を継続，1 名が新規就職，就職活動変化のスケールは 7.14/8 ポイントであった。（表 2-1）

[成果] 先行研究②の目的である，「特に就労が困難な精神・発達障害学生特有の適性や能力を活かせる就労と継続・定着」に関して，i) 精神・発達障害特有の適性や能力を活かせる就労ができたかについて，14 名のプレワーク参加学生の就職先と職種から，約半数の学生は当初より希望していた職種に就職でき，残りの半数は，最初から希望職種を絞り込んでいない，職種よりも場所など他に優先順位が高い就職を選択など，ばらつきが見られた（表 2-2）。しかし，高等専門教育を卒業したスキルを活かした職種を自ら時間をかけて選択できるという，今後に希望を持てる内容となった。ii) 継続・定着については，上記表の通り約 9 割の学生が X 年度から 2 年間就労を継続しており，全国の発達障害者の 1 年後の定着率（障害者求人 79.5%，一般求人 33.3%，障害者職業総合センター，2017 年）よりも高い結果となった。

表 2-1 プレワークメンバーの就職活動変化スケール

段階	内容	X-2	X-1	X 年	X+1	X+2
0	参加表明・保護者面談、同意					
1	プレワークに参加					
2	プレワークで自己表現できる	1	1	3	2	1
3	学内就労体験（学内アルバイト，インターシップ）	3	2			1
4	就労移行支援事業所の見学に行く	1				
5	就労移行支援事業所体験（インターンシップ等）	4	3	5		
6	就労移行支援事業所の通所決定	4	6			
7	進路決定（就職，アルバイト，進学）	4	7	3	8	1
8	継続就労			4	4	11
	未定・不明・その他		1	5	6	6
計		17	20	20	20	20
	在学生（内数）	4	6	5	2	2
	卒業・退学（内数）	13	14	15	18	18

表 2-2 プレワークメンバーの就学・就労状況(X+2 年)

※表内()数は 4 月時点の確認数

就労形態・(職種)	職種の希望状況 (●希望, ▲希望なし)	お話し会参加者		就学・就労状況	
		4 月	12 月	4 月	12 月
(一般) 就労 継続中	(●SE, ●IT 関係, ●アパレル, ●経理)		2	2	4(2)
(一般) 就労 就職		1		1	
(障害) 就労 継続中	(●バイオ関係, ▲一般事務, ▲倉庫業務)		1	2	3(2)
(障害) 就労 就職		1		1	
(障害) 就労継続 A 型 継続中	(●SE, ▲一般作業)	2		2	2
(障害) 就労継続 B 型 継続中	(▲整理業務, ▲菓子製作)	1	1	1	2(1)
(障害) 就労継続 B 型 利用開始		1		1	
在学中		1		2	2
ボランティア		1	1	1	1
不明				1	
計		8	5	14	14

研究(3)：研究②で実施したお話し会に参加した学生 13 名中，卒業後 1～2 年経過した就労継続中

の10名にインタビューを行い、現状と卒業時から変化した点、その時々状況に沿った就労選択の経過や現状の様子が語られた内容を4月と12月別に抽出し、テキストマイニングを行い、内容のポジティブとネガティブの割合、感情の表出を比較した(表3-1)。

4月はプレワークとピアルームメンバーが集まったのは1年ぶりであり、近況報告の中には現状を肯定的捉えられないネガティブな言葉が多くを占めた。しかし、お話し後のアンケートで、卒業・就職の時点から変化した点を尋ねた項目では、インタビューを受けて、できるようになっていることがあると気づいたという意味合いのポジティブワードが増加した。約8ヶ月後の12月では、4月と比較してポジネガの合計は約1.5倍に増加し、感情面では喜びが増幅した。これは、4月と比較して、就職の継続ができている学生が6名から11名に増えていることから、自信を持っている反面、不安や苦しいことも増え、言葉として表現されたことが窺える。加えて、久しぶりに会えた仲間との交流により、安心感を得て日頃誰にも言えない本音が吐露されたことの裏付けと言える。また、アンケートの感想では13人全員が、「また参加したい」、「話せる場があってよかった」、「久しぶりに先生や仲間とあって元気がもたらえた」などの記述と、何よりも参加者の安心した表情から、ピアサポートのポジティブな相互作用の継続が窺えた。

ここで、5年間に渡り、学生を支えてきたCo.による学生との連絡・状況把握のやり取りからの考察を以下に記載する。

12名のメール返信は、自身の状況に関わらず、殆どが参加を希望する内容であった。「自分のことを整理しつつ、楽しくお話しができたと思います」と楽しみにしている様子、「出来れば参加したいのですが、まだ予定が見えないので」と就職したばかりで余裕がない様子、「連休はがっつり仕事なのでせっかくのお誘いですが、今回はやめておきます」、「(遠方に就職で)残念ながら移動が難しい」等、生き生きと働く姿を想像できるメッセージが加筆されていた。12月のメールは返信が少なく、年度途中であったこと、仕事に忙しく余裕がないか、精神的な不調を抱え返信できないかは不明であるが、直前になり精神的な不調を理由のキャンセル、遠隔地のため帰省が難しいと返信があった。また、卒業目前に停滞していた在学学生は、来年度卒業と障害者就労支援センターにつながり就職活動をしていると報告があった。参加者の声からは社会移行が徐々に定着し、職場や支援員に支援要請が移行しているとも考えられる。今後メンバーと不定期に連絡を取り合うことも、細く長い支援の一助と考えられる。

個々の学生が不安や喜びをメールや対話によってCo.を頼りに伝えてきたことが窺え、長期に渡って支援を継続する際に、変わらず母校に居続けてくれるCo.の存在の大きさは計り知れず、継続支援を行う上での重要な要素であると言える。

加えて、研究(3)のお話し会に2回共参加した学生3名のインタビュー記述の比較から、自分自身や周囲に対する感情の変化、適応や気持ちの落ち着き、評価、意欲が見られた。(表3-2)

表3-1 インタビュー及びアンケートの言葉によるポジ・ネガと感情の時系列比較

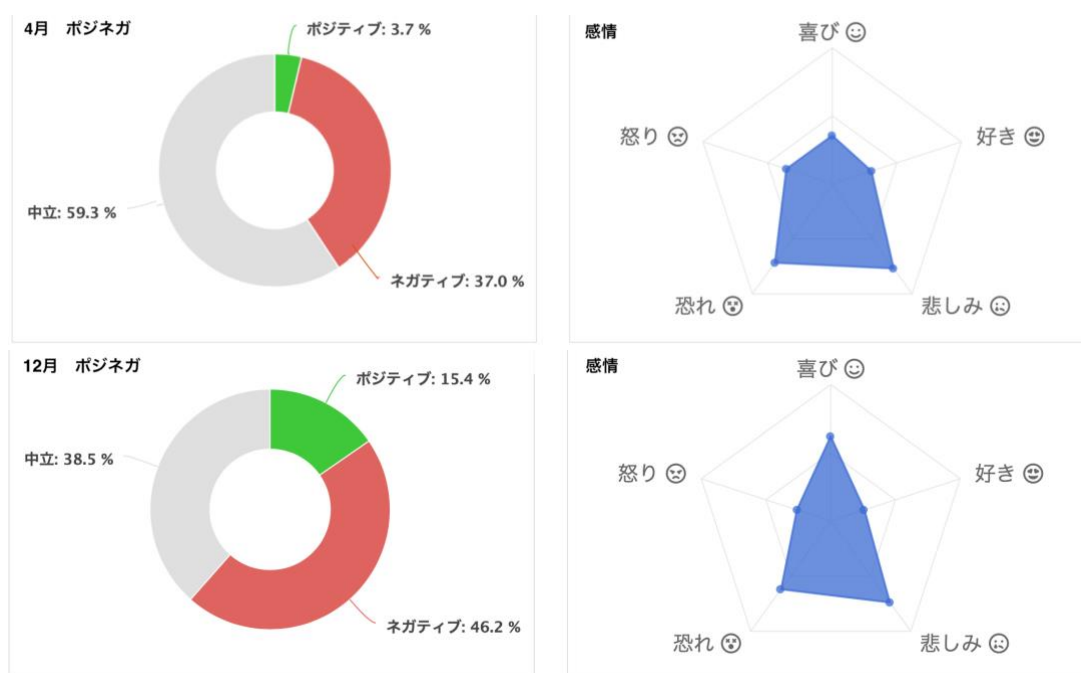


表 3-2 お話会継続参加学生インタビューの変化の比較

	4月	12月
A	・就労移行支援の利用が終わる、集中が続かず、何事にも妥協ができない自分への気づきを通所得られた。これからB型に移り、やりたいことの幅を広げていきたいが渾沌としている。	・B型で作った菓子を持ってきた、メンバー全員に配りたかったが、準備できずに申し訳ない気持ち。自身の融通の利かさを悔やむだけでなく、できるように変わりたい、先の目標にしたい。
B	・障害者就労を考えていたが、就職情報サイトで就活し一般就労を選んだ。就職先は大学の近隣、環境変化を職場だけに限定できた。研修中に居眠りをすることもある、朝の起床が辛い。	・休日はひたすら寝ている、就労が疲れる反面、気ままに過ごせる自由を感じている。在学時に比べ、職務中はいくらか話せるようになった自分を評価できている。
C	・在宅で過ごしている、就労移行支援事業所に通所したが、自身に不適合だった。別の事業所への通所を提案されたが、勇気がでなかったの で、転所はできなかった。	・少し悲観的に考えなくなった、徐々に自身の中で考え方のバランスが改善している。今後挑戦したいと思っていることがあるが、うまく周囲に表現できないもどかしさもある。

まとめ(4)：本研究のまとめとして、以下の3点を考察した。(1)精神・発達障害学生の就労支援として、在学中から就職後まで学内ピアサポートグループによる支援プログラムと、ピアによる相互支援が継続的に有効であること、(2)障害学生の就労には、T、Co.と就労支援事業所・企業等との連携により、学内から移行支援体制を作ることがスムーズな就労へのつなぎを可能にすること、(3)上記のプロセスを経ることにより、自分の特性を活かした就労先を選択でき、そのことが就労の継続・定着につながることを示唆された。このことは、「就職において各大学等が取り組むべき課題」(文部科学省、2018)で掲げている。①職業観の涵養や自らの障害特性、職業適性の理解、対処法の習得、権利擁護の知識や理解に関するプログラムの提供、障害に配慮したアルバイトやインターンシップのための支援、②就労形態の多様性や合理的配慮、相談機関や制度に関する情報提供、③学内・学外(大学間、支援機関、就労先)の連携強化、支援内容の効率的な引き継ぎ、等の明示された課題に対し、本研究は具体的な方法を示した実践であると言える。また、「発達障害のある学生の就労における課題」(青木、2018)として、①継続して働くことを見据えた就職とキャリアプランの構築：修学を含め、多様なスケジュールやロールモデルの集積、学内・学外(大学間、支援機関、就労先)の連携、マッチング(業務内容、体調、特性、環境等)、障害者雇用における動機づけを保てるような仕事の引き出し、インターンシップの活用、とがった人材を操縦できる雇用者側への支援、②グレーゾーンの学生への対応、等のさらに具体的な課題がここ数年で明らかになり、本研究は障害学生の就労・継続に向けた支援のモデルケースを先んじて実践し、一定の成果を示したと言える。

引用文献

障害者職業総合センター「障害者の就業状況等に関する調査研究」、2017
 文部科学省「障害のある学生の修学支援に関する検討会」第二次まとめ、2018
 独立行政法人 高齢・障害・求職者雇用支援機構「障害者雇用事例リファレンスサービス」、2018
 青木真純「発達障害のある学生の就労における課題」全国キャリア就職ガイダンス発表資料、2018

3. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計1件) 日本人間性心理学研究(投稿準備中)
 〔学会発表〕(計1件) 日本人間性心理学会第39回大会
 〔図書〕(計1件) 「就活に不安を抱える学生のための就活支援ワーク・プレワークプログラム」九州産業大学基礎教育センター・キャリア支援センター(JSP 科研費 JP15K13255) 増刷

4. 研究組織

研究協力者氏名：山川 京子(九州産業大学学生相談室常勤カウンセラー、学修支援コーディネーター、2017年当時)

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。